

*World's
Famous
Classics*
20

世界文学全集

Novalis

HEINRICH VON OETTERDINGEN

Friedrich Hölderlin

HYPERION

ノヴァーリス／ヘルダーリン／登張正実 野村一郎訳

青い花／ヒュペーリオン

Friedrich von Hardenberg

born in 1772 in Marburg

世界文学全集——20

ノヴァーリス／ヘルダリーン

1977年6月28日第1刷発行

訳者 登張正実／野村一郎

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社 東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 112

電話 東京 03(945)1111(大代表)

振替 東京 8-3930

製版所 株式会社まゆら美研

印刷所 豊国オフセット株式会社

製本所 株式会社堅省堂

© KODANSHA 1977 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

0397-410205-2253 (0) (文3)

目次

ノヴァーリス

青い花……………登張正実訳

5

訳注……………

140

ヘルダリーン

ヒュペーリオン……………野村一郎訳

149

訳注……………

311

ノヴァーリス……………登張正実

315

解説・年譜

ヘルダリーン……………野村一郎

334

写真||野村一郎／上智大学図書館／本社写真部

装幀||アド・ファイブ

ノ
ヴ
ァ
ー
リ
ス

青い花

(原題

ハインリヒ・フォン・オフタディンゲン)

登張正実訳

『青い花』主な登場人物

ハインリヒ・フォン・オフタディンゲン——
中世ドイツの詩人であつたという伝説的人物
の名を取つた本篇の主人公。従つて舞台は中
世であるが、全体はメーメルヘン風の物語で
ある。二十歳の青年ハインリヒはふしぎな青
い花を夢見たのち、母と共に母の里アウグス
ブルクへ、「故郷をめざす旅」にのぼる。途
中、道づれの商人から詩の世界へ引きいれら
れ、さらにさまざまな人物を通して、歴史、

東洋、自然等について内的体験をあげわいな
がら、しだいに「詩人」となるべく成長して
いく。

クリングスオール——ゲートを思わせる人物
で、ハインリヒに詩の本質を告げ、詩と愛の
救済作用によるあらたな宇宙の調和と統一を
描く長いメーメルヘンを語る。

マテイルデ——クリングスオールの娘。ハイ
ンリヒと永遠の愛に結ばれる。

第一部 期待

献（訳注）げることば

きみは、広大な世界の心の中深く眺めようとする

気高い衝動をばくの中に呼びさました

きみの手でばくは信頼の念にとらえられ

それがあらゆる嵐の中をばくを安全にはこんでくれる

さまざまな予感をもってきみは子供を育て

子供をつれておとぎの園（訳注）を歩んだ

きみは心やさしい婦人の原像（訳注）として

若者の心をこよなく感奮させた

ばくをこの世の辛苦につなぎとめるのは何か
ばくの心といのちとは永久にきみのものではないのか
きみの愛がばくを地上でまもってくれているのではないのか

きみのためにこそばくはこの身を高尚な芸術に捧げられるのだ

恋しい人よ、きみがミューズの神となり

ばくの歌の無言の護り神であろうと思っているからだ

歌のかくれた力はこの地上で

絶えまなく化身してわれらをむかえる

あるいは永遠の平和として国土を祝福し

あるいは青春としてわれらを包み流れる

その力こそわれらの目に光をそそぎ

すべての芸術にたいする感覚をわれらにあたえ

そして心たのしい人たちも、心疲れた人たちも

陶然と敬いつつ歌の力を驚きたのしむ

そのふくよかな胸からぼくはいのちをすすった
その力によってぼくはいまあるぼくのすべてとなり
喜び勇んでわが面^{おもて}をあげることができた

ぼくの至高の感覚はまだ眠っていた

そのとき歌の力 天使となつてぼくに舞いおりるのが

見え

ぼくは目ざめて その腕に抱かれて飛び去つたのだ

第一章

両親はすでに床について眠っていた。柱時計が单调な拍子をくりかえし、そとをざわめく風に窓がかたかた鳴っていた。ときおりさしこむ月の光に部屋の中がぼつと明るくなる。青年は寢床に身をよこたえたまま、まじりともせず、あの見知らぬ客と、その客の話したことを考えていた。『こんな風に、なんとも名づけようもない願いがぼくの心を目ざめてきたのは、あの人の話した宝のためじゃない』と彼はひとりごちた。『物欲などはおよそぼくには縁遠い。でも、あの青い花^{註3}だけは、なんとかしてこの目で見たいものだ。あの花のことがたえず心にひっかかって、ほかのことはなんにも思いうかべることができない。こんな気持ちになったことは、これまで一度もない。まるで、つい今しがた夢でも見たか、眠っているうちに別な世界へはいりこんでしまったかのようだ。だって、ぼくのこれまで生きていた世界では、だれが花などに心をわずらわしたものがいただろう。それ

に、一輪の花にたいしてこんな奇妙な熱にとりつかれるなんて、これまでついぞ聞いたこともない。そもそもあの客はいつだどこから来た人なんだろう。われわれのだけれひとりああいう人を見ていない。けれども、なぜこのぼくがあの人話にこんなに心うたれたのか、さっぱり分らない。ほかの人たちだって同じことを聞いているのに、だれもこんな気持にはなっていない。ぼくにしても、この奇妙な状態についてだれにも話すことさえできないなんて。ぼくはたびたびうっとりとするばかり快い気分になる。ただ、あの花を十分に思いうかべられないときに限って、なんとも深く、せつないものが胸にこみあげてくる、こんな気持がだれかに分ってくれたらと。こんなに明白に見たり考えたりできないようなときは、ぼくの頭がどうかしているのだと思った。そう思ってからというもの、いっさいのものがずっとよく分るようになった。ぼくはかつて、動物も、植物も、岩石も人間たちとことばをかわしたという古い昔の話聞いたことがある。ぼくはいままさに、それらが話し出そうとしているかのような、ぼくに話したいことが見て分るような気がしているのだ。まだまだぼくの知らないことばがたくさんあるにちがいない。ぼくがもっと知っていれば、何も彼もずっとよく理解できるのだろう。以前はぼく

は踊るのが好きだったが、いまは音楽に思いを馳せるほうが好ましい』青年はしだいに甘美な空想にひたりつつ眠りこんだ。その眠りで彼ははじめに、見きわめがたい遠いかなたの、荒れはてた未知の土地を夢みた。彼はふしぎなほどかるやかに海をこえて歩いて行つた。奇妙な動物が見えた。さまざまな人間たちといっしょに、あるいは戦闘のなかに、はげしい雑踏のなかに、あるいは静かな小屋のなかで生活した。やがて彼は囚われの身となり、ひどくみじめな苦しみにおちいった。いっさいの感情が彼のなかでこれまで味わったこともないほど高まった。彼は、はてしなく多彩な生活を生きぬいて死に、そしてよみがえり、熱情の限りを尽くして愛し、それからまた永遠に恋人と別れていた。ようやく、そとが白みそめる朝まできころ、彼の心は静まって、目にする形象がはつきりと定まってきた。とある暗い森のなかをひとり歩いてるように思われた。ほんのときたま日の光が網なす緑をぬってさしこむだけだった。まもなく、山上のほうまでつづいている岩のはざまの前に出た。彼は、昔そこを流れたはげしい水が上から流し落した岩塊をこえて、よじのぼらねばならなかった。のぼるにつれて、森は明るくなり、ついに彼は、山腹にある小さい草原にたどりついた。草原のむこうに高い断崖がそびえ、その

ふもとに穴がひとつ見え、それは岩のなかをくりぬいた坑道の入口らしかった。その坑道は平らにつづいていて、そこをしばらくゆっくりと進んで行くと、大きく開けたところに出る。そこからさしこむ明るい光が、まだ遠くにいたときから彼にむかつてかがやいた。その広い場所足踏みいれると、大きな水柱が目についた。その水柱は噴水さながらに丸天井までのぼっては、上のところでは無数の閃光となって飛び散り、舞い落ちて大きな池に集まる。水柱は熱した黄金のようにかがやいた。どんなにかすかな物音もきこえず、清らかな静けさがこの壮麗な光景を包んでいた。彼は、限らない色どりを見せて波うちふるえている池に近よった。洞窟の壁はこの水で一面にぬれていて、水は熱くなくてつめたく、壁をぬらしてくすんだ青白い光を放つだけだった。彼は手を池にひたして、唇をしめした。霊妙な息吹きが身体にしみとおるよう、奥の奥まで強くなりさわやかになったように感じた。水浴びをしたいという気持が湧いておさえきれず、着物をぬいで、池のなかへおりた。夕映えの雲ひとつ、彼をおしつづんで流れゆくように思われた。ある神々しい感情が彼の体内に流れあふれた。数知れぬ思いが彼のなかで、熱のこもった欲情をこめてたがいにまじりあおうとつとめた。ついぞ見たこともない、あた

らしいさまざまな像があらわれては、また溶けあい、彼のまわりではつきり目に見える姿となった。そして快い水のどの波も、やわらかな胸さながらに彼によりそった。流れる水は、かわいらしい娘たちの溶けたもので、それが若者にふれて、たちまち肉体をとりもどすかに見えた。

恍惚たる思いに酔いしれながらも、ひとつひとつの印象を意識にとらえつつ、彼は、池から岩のなかへそそぎこむかがやくばかりの流れに沿って、ゆっくりと泳いで行った。そのうちにうとうとと甘美なまどろみにおそわれて、言いあらわしようにもないできごとをあれこれ夢見たが、べつな光がぱつと照らして彼を夢から目ざませた。気がつくとき彼は、とある泉のへりの柔かな芝生の上にいた。泉の水は空高く噴きあがっては、そこで散りうせるように見えた。色とりどりの条紋のある青黒い岩がすこし離れたところにそびえていた。彼をつつむ日光はふだんよりもいちだんと明るく、おだやかで、空は紺碧をたたえて澄みきっていた。だが、彼を何よりも強い力でひきつけたのは、泉のすぐそばに生えていて、つやつやとした、幅広い葉で彼にふれた一輪の丈の高い淡青色の花だった。その花をとりまいて、ありとあらゆる色の無数の花が立ちならび、ふくいくたる香りが大気に立

ちこめていた。彼はしかし、青い花以外には目もくれず、長いあいだ言い知れぬこまやかな情をこめて花を見つめた。ついに彼は花に近しようとした、そのとたん、花はいきなり動き出し、姿を変えはじめた。葉はいちだんとつやをまして、伸びる茎にまつわり、花は彼にむかつて垂れかたむいた。花卉は開いた青い襟状となり、そのなかにやさしい顔がうかんでいた。この奇妙な変様を見て彼の甘美な驚きはつのるばかりであったが、そのときとつぜん母の声に呼びさまされて、彼は、朝の光がはや金色に染めている両親の部屋にいたのであった。彼は無上の喜びにあふれていたから、こうして夢を破られてもふきげんになるところか、母親にあいそよく朝のあいさつをして、母の情愛のこもった抱擁にこたえた。

『寝坊なやつだな』と父が言った。『おれはもうずっとここに坐って、やすりをかけているんだぜ。おまえのおかげでハンマーを使うことができなかったよ。母さんがかわいい息子を寝かせておきたかったのね。朝飯も待たねばならなかった。おまえは小ざかしく学問の道をえらんだが、その道を行く人たちのためにおれたちはこうして休まず働いているんだ。それでも、おれの聞いたところでは、りっぱな学者は、すぐれた先人の偉大な仕事を学ぶために、夜もろくろく寝ていられないというぞ』

『お父さん』とハインリヒはこたえた。『これまでついでしたこともない長寝を怒らないでください。ぼくはゆうべおそくなつてやつと寝入ったんです。そしてふしぎな夢をたくさん見て、おしまいに言うに言われぬ美しい夢を見たんです。この夢はいつまでも忘れられそうにありません。それに、ただの夢だと言ってすまされないような気がするんです』『ハインリヒ』と母が言った。『おまえはきつと仰むけに寝たんだよ。そうでなければ寝る前のお祈りのときに変なことを考えていたのね。いまでもまだ様子がまるでおかしいよ。朝御飯をたべて、元気になるんだね』

母は部屋から出て行ったが、父は熱心に仕事をつづけながら語った。『夢なんてものは、えらい学者さんたちも、どんなことを考えようと、泡のようなものだ。おまえも、そんなろくでもない、くだらぬ考えに心をむけないほうがいいぞ。いまはもう夢に神様が姿をあらわすという時代じゃないよ。聖書の話に出るあのえりぬきの人たちがどんな気持だったのか、われわれにはわからないし、これからもわかるまい、聖書の話のころは、人間のことながらも、夢というものも、様子がちがっていたにちがいないものな。』

われわれの生きているこの世界の時代になると、天国

との直接の交わりはもう起こらんよ。いまでは、古代の物語や文書が、おれたちが必要とするなら、神の世界に於いての知識をあたえてくれる唯一の源だ。そしてあの明瞭な啓示に代って、いまは聖霊が、善意のこもった賢い人たちの分別を通じて、また信心ぶかい人たちの行状や運命を通じて、間接におれたちに語りかけるだけだ。奇蹟を描いた現代の絵を見ても、おれはべつに感銘をうけなかった。そして、いまの牧師さんたちの話して聞かすいろんな偉大な行為を信じたこともない。でも、そういうことを聞いて、信仰を高めようという人は、そういうらしいさ。おれは、人の信念を乱すようなことは、つつしんでいるんだからね』でも、お父さんはどうしてそんなに夢がおいやなんですか。夢の珍らしい変化や、かろやかな微妙な性質は、ぼくらの考えを確実に生き生きと活動させるではありませんか。どんな夢も、どれほどわけのわからぬ夢でも、神の摂理とまでは考えないにしても、私どもの心の奥ふかく、たくさんのひだをもつて垂れている神秘のとばりの、意味ぶかい裂け目といってよいふしぎな現象ではないでしょうか。思慮に富んだいくつもの書物にも、信ずべき人たちの夢物語が出ています。このあいだ宮廷牧師さんが私どもに話されて、お父さんもふしぎに思われたあの夢のことでもせめて思い出

してください。

しかし、そういう話がなくなつて、お父さんが生れてはじめて夢というものをごらんになるとしたら、びつくりせずにはおれないでしょう。そしてわれわれにはごくあたりまえのことになつてゐる夢というできごとのふしぎさをきつと否定なさらないでしょう。夢というのは、人生のきまりきつた平凡さを防ぐように思われるのです。日常の世界では束縛されている空想がのびのびと気楽に働くんですよ。その場合空想は人生のあらゆる像をごちゃまぜにし、おとなの不断のきまじめさをたのしい子供の遊戲で中断します。夢がなかったなら、われわれはきつともつと早々と年を取るでしょう。ですから、夢は、たとえ直接天から授けられたものではないとしても、神のはなむけ、神聖な墓へ巡礼するこの世の旅における親しい道づれと考えられます。ゆうべぼくの見た夢は、ぼくの一生にあらわれた無意味な偶像なんかじゃけつしてありませんよ。だって、この夢はぼくの魂のなかへ大きな歯車のように食いこんで、ぼくの魂を力強く躍動させて前進させるのを感じるんですから』

父親は晴れやかにほえむと、ちようどはいつてきた母親を見ながら言った。『母さん、ハインリヒのような子が生れたのは、昔のあのころのせいだということがよ

く分るね。ハインリヒの話には、あのころおれがローマから持参して、おれたちの結婚の晩をすばらしいものにしてくれたあの強いイタリアのワインが湧きたっているよ。あのころはおれだつていまとはちがつていたものな。南国の空気がおれの心をほぐれさせて、おれは勇氣と喜びにあふれていたし、おまえだつて熱情のこもつたすてきな娘だつた。そのころおまえのお父さんは華やかなりしで、音楽家や詩人たちが方々から集まつてきたものね。アウグスブルクでは久しいこと、あれほどにぎやかな結婚はなかつたものな』

『さつき夢の話をしてましたね』と母親が言った。『おぼえているでしょう。あのころやはり、あなたがローマで見たという夢のことを私に話したことがあつたわね。その夢でまずあなたは、アウグスブルクの私どものところへ、私をもらいに来ようと考えついたんでしたわね』——『いや、ちようどいいときに思い出させてくれたね』と父親は言った。『あのころ長いこと心にかかつていたあの奇妙な夢をすっかり忘れていたよ。でも、ほかでもないあの夢が、さつきおれが夢というものについて言つたことの証拠なんだ。あれ以上順序だつてはつきりした夢を見るなんて、できっこないよ。いまだつてひとつひとつの場面を見たとおりにくわしく思い出せるも

のな。だが、その夢にどういふ意味があつたらう。おれがお前の夢を見て、まもなくお前をもらいたいという憧れにとりつかれたのは、ごく自然だつた。その前からおれはお前を知つていたんだからね。お前の感じのいい、かわいい姿に、はじめて会つたときにもうたちまち心惹かれたんだよ。ただ外国を見たいという氣持が、あのころお前をもらいたいという望みをまだおさえつけていただけだね、あの夢を見たときには、その好奇心はもうだいいいやされていたから、こんどは愛情のほうやすやすとおれの心を占めることができたというわけさ』

『その奇妙な夢とやらをぜひ聞かせてください』と息子が言った。——『ある晩のこと、おれはそとをぶらついていた』と父親は語りはじめた。『空はあくまで澄み、月が古い柱や壁にぞつとするような青白い光をあびせていた。仲間は娘たちを追いかけて行つたし、おれは郷愁にかられ、人恋しくなつて、ひろい野外へ出ていったのだ。そのうちにのどが乾いてきたので、ワインかミルクを一杯飲ませてもらおうと、行きあたりばつたりにある農家にはいっていった。老人がひとり出てきたが、おれをたぶんうさんくさい客だと思つたらうよ。おれがたのみのべると、彼は、おれが外国人で、ドイツ人だとわかつて、親切に部屋に通して、ワインを一びん持つてきた。

そしてよくを坐らせて、商売をたずねたりした。その部屋には書物や骨董品がいっぱいあってね、おれたちはよも山話をはじめた。老人は、古い時代のことだの、画家、彫刻家、詩人たちのことだのをたくさん話してくれた。

おれはそれまでそんな風な話を一度も聞いたことがなかったので、なんかあたらしい別世界に上陸したような気がしたな。老人は印章の石やそのほかの古い細工品を見せ、それから、生き生きと熱情たっぷりにすばらしい詩を読んで聞かせてくれた。そんな風で時間はまたたく間に過ぎて行つた。その晩、ふしぎな想念や感情があれこれと入りみだれて、おれの心にみちあふれたことを思い出すと、いまでも、おれはたのしい晴れやかな気持ちになるね。彼は異教時代のことをよく知っていて、信じがたいような情熱で太古の時代をふりかえりあこがれていたよ。もう夜もふけて、とても帰れなかったので、とうとう一部屋あてがわれて、おれは泊ることになった。おれはすぐさま眠りについた。すると、故郷の町にいて、郊外をぶらついているような感じだったね。どこかへ出かけて、何か用事を果たさなければならぬような気がしたんだが、さりとてどこへ行つて何をしたらよいのか、さっぱり分らんのか。おれはすごく早い足取りでハールツへ行つた。たぶん結婚式へでも行くようなつもりだつ

たんだらう。途中一步も休まず、たえず野をつつきり、谷をこえ森をぬけて、まもなくある高い山にたどりついた。頂上へのぼると、黄金の牧場が見え、テューリングが一面に見わたせて、どちらをむいても近くに眺めをささげる山はひとつもなかった。黒い山並のハールツ山地とむかいあい、数知れない城や僧院や村々が見えた。こうして心身とみに爽快になると、ふと、ゆうべ泊めてくれたあの老人のことが思ひうかんできたんだ。あそこへ泊つたのは、ずいぶん昔のことのようにも思われた。まもなく山へはいり坂道を見つけて、それをくだつて行つた。しばらくすると大きな洞窟のなかへはいつた。と、そこに、長い服を着た老人が、鉄の机の前に坐り、目の前の、えも言われぬ美しい娘の大理石像をじつと眺めているんだよ。老人のひげは鉄の机をつらぬいて下に垂れ、彼の足をおおっている。威厳と親愛をかねそなえた様子に見え、ゆうべ見た古代彫刻の頭をおもわせるものがあったな。洞窟にはかがやく光がみなぎっていた。おれは立つたまま、その翁おきなを見ていると、とつぜん泊めてくれた宿の老人がおれの肩をたたき、手をとつて、長い通路をとつて行くんのだ。しばらくすると、日光のさしこんでくるような薄明りが遠くに見え、その方へいそいで行くと、まもなくおれは緑の広場に出ていたん